外注を用いた作品制作

人間総合科学研究科　芸術専攻博士前期課程 1 年　小池　美佳子

私は芸術専攻のクラフト領域に在籍している。クラフト領域は、木工、ガラス、陶磁の 3 分野からなる。私はその中でも陶磁を専門に制作をしており、土で形を作り、窯で焼成して陶に変化させるというプロセスでしかできない造形を研究している。先に自分の表現したいものがあり、それに適した素材、方法を選び取るのではなく、自分なりに解釈し、魅力的だと感じている素材の性質や作品に至るまでのプロセスを造形の拠り所とし、制作をしている。土という素材は、可塑性があり、扱いやすいようにも思えるが、窯に入れ焼成することで形が大きく歪んだり、ひびが入ったり、想像通りの形のものを作るのは簡単とは言えない。その分自然素材である陶特有のテクスチャや色、土でしかできない形態は人だけの力では作ることのできない魅力を持っていると私は考えている。私は主に手びねりという、紐状に伸ばした粘土を輪状に積み上げて形を作る技法を用いて立体作品を作っている。手びねりでできる形は内側に空洞を持っており、形を作る際は空洞の外側だけでなく内側にもアプローチでき、塊の粘土を外側から彫ったり、盛ったりする技法ではできない形態感を生み出すことができると考えている。

今回、「外注を用いた作品制作」という授業課題を受けて工作部門に作品のパーツの工作依頼をさせて頂いた。その課題は作品を自分の手で全て制作するのではなく、業者に作品の一部や全体の制作を依頼をすることで自身の制作や表現の幅を広げることを目的としたものだった。どの素材をどのような加工で外注をするのか決める際に工作部門のガラス工作の作例が目に留まった。主に実験器具として作られているガラス工作だが、私にはその機能のために生まれた造形の面白さが非常に新鮮で魅力的に感じられた。ガラス工作物は、回転体

作品 1

作品 2

作品 3

をベースにした幾何形態だが、熱により溶着、変形した部分は有機的な膨らみを持った特徴的な形をしている。またガラス工作物は、塊ではなく空洞で内側や向こう側が透けて見えたり、光を反射したり、不思議な存在感を持っていて、それらの要素から、自身の作る陶の形とぜひ組み合わせてみたいと考えた。これまでの制作は、作る前にどのようなものを作るかなんとなく決まってはいるものの、最終的には実制作に入ってから作りながら考えて形を決めていくというものだった。工作依頼となるとあらかじめ形やサイズを全て決定した上で依頼をしないと成り立たないので、これまでとは大きく違う制作で、戸惑うことが多かった。実際に制作してみて、自分なりには陶とガラスの材質感や形態の違いのバランスがとれ、成功したと感じている。初めての工作依頼だったが、依頼方法や工作について専門的な説明など工作部門の方に親切に対応していただいたので、自身の納得のいく制作ができ、非常に満足している。

作品全体